



筑紫女学園大学リポジト

資料紹介 水月哲英撰併書石言先生碑翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 知美 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000041

資料紹介 水月哲英撰併書石言先生碑翻刻

小林 知美

はじめに

本稿は、筑紫女学園創立者水月哲英（明治元年（一八六八）～昭和二三年（一九四八））に関わる資料として、福岡県八女郡広川町の慧宏山西念寺（真宗大谷派）に所在する「石言先生碑」（図1）拓本影印の掲載とその翻刻を行うものである。

石言先生（図2）とは西念寺第十代住職の蒲池徳議（天保二年（一八四一）～大正二年（一九一三））の号で、水月哲英の修学初期の師の一人である。水月哲英は糸島市普賢寺（真宗大谷派）第一三代住職吉

富田信の三男として生まれ、小学校卒業後、久留米にあった真宗大谷派の僧侶養成校の筑後教校で仏教学を学んだ。その後、八女郡木屋村の光善寺（真宗大谷派）の第一三代住職はこや徳令（号は石門）の私塾修文館に約一年半、修文館が閉じられた後は石門の高弟石言の私塾有萬家塾で約一年半の修行を積み、その後、中学修猷館、第五高等学校、東京帝国大学の漢学科に学んだ。石門は「僧儒」、石言は「儒者」とよばれており（福岡県八女郡教育会編『郷土教育資料』昭和九年（一九三四））、哲英が修学を初めたころの師二人が儒者であったことが、その後の彼の学問的姿勢に影響を及ぼしたと考えられている。^{（註1）}

「石言先生碑」については既に、石言先生顕彰会編

『石言先生』（昭和三十三年（一九五六）四月）、広川町教

育委員会主催「広川町古墳公園資料館・第三回企画展

ふるさとが生んだ偉大な教育者 蒲池石言先生顕彰と

滑石経展」リーフレット（平成二二年（二〇〇〇））、

「故郷の石碑シリーズ第七回『石言先生碑』」などに紹

介されているが、本稿では、哲英の撰文・揮毫になる



図1 石言先生碑



図2 石言先生肖像（石言先生顕彰会『石言先生』1956年より転載）

作品として、このたび新たに取得した拓本の影印に、翻刻と書き下し文を附して掲載する。^(註6) 石碑正面は大文字（たて二五センチ）のゆつたりとした行書体で、裏面は小文字（たて五センチ）の端正な楷書体で書き分けられている。

水月哲英と石言先生

水月哲英は、自らの修学について「私は小学校を卒えて明治十六年七月石門先生に就いて学び始めました。居ること一年、更に石門の高弟蒲池徳讓先生に学びました。（中略）右諸先生の御人格を概括して伺いますれば石門秋月根本の三先生は仰げば愈々高く、高峻にして攀つべからず、島田笠間蒲池の三先生は洋々たる大海の如く、如何なる者をも包容接受して親しまるる感があります」と振り返っている。^(註4)

石言は学問に精励し、一六歳からの六年間と、二七歳からの八年間の二度にわたり修文館に在塾し、石門第一の高弟として石門の代講を勤めるようになり、師より名と号に一字を賜った。そのような石言の健康を心配した母の勧めで久留米藩の武道指南であった津田一左衛門（入門し稽古をして丈夫な体となったとされる。^(註5) 師石門が本山（東本願寺）でも名の知られた人物であった縁からか、石言は四十歳で上京し現如新法主ノ侍講となり、一年後病気のため帰山、周囲に請われ開塾し、有萬家塾と名づけた。

哲英は、咸宜園の広瀬淡窓門下の石門、その高弟石言のもとで漢学修行をした者として漢詩をよくし、自作の漢詩の墨跡が複数伝来して

おり、^(註6) 地域の功労者の石碑の撰文・揮毫に関わることもあった。^(註7) ような漢詩・作文のなかでも、大正六年（一九一七）五〇歳の哲英が、自らの恩師である石言先生の顕彰のため書いた碑文は重要な意味をもつと思われる。碑文中で「其（石言）道行は石門師に酷似する所有り」と述べており、石言がその師石門を模範としていた姿勢が謳われている。

「石言先生碑」が建てられた大正六年（一九一七）十一月は、明治四〇年（一九〇七）五月の私立筑紫高等女学校開校から一〇年経過し、一〇月二五日に創立一〇周年記念式を挙行した直後にあたる。このことから、碑の撰文内容に、哲英自らの教育者としての師弟関係を確かめようとする意図をも読みとることができるのではないだろうか。哲英は、石言先生碑の撰文から一七年後、昭和九年（一九三四）に石門の事績と詩文をあつめた『石門先生』を編集・刊行している。その序文には「石門先生は八女郡の山奥に居られましたため世に知られていないのを遺憾」に思い、「石門先生の言行は現今の社会教育に資すること多大であると信じて」この書を記したとある。^(註8) このことから、哲英が両師の言行を顕彰したのは、それが社会教育に資すると信じていたからであったことが知られる。

翻刻と書き下し

〔石碑データ〕

自然石 高さ（台石含む）三〇〇センチ、幅二一〇センチ、奥一五〇

センチ。基壇（一五八センチ）上に建つ。石碑表裏に陰刻銘。

【石碑拓本影印（表面）】「石言先生碑」



【原文】

先生姓蒲池氏名德讓號石言八女郡西念寺緣測長

男以天保十二年二月生十六歲學漢籍於石門德令師精勵

十年有所造詣實石門第一高弟也其名

及號各冠師之一字蓋有由哉先生又通佛書性長唱導元治

元年爲同寺第十世住職明治六年本山撰光院連枝就學於石門

師也應召爲侍講凡三年學德愈躋寵辟再至明治十三年二月

現如新法主延爲侍講可謂希世之榮耀矣在京一年以病辭歸

明治十八年八月新設有萬家塾于寺側教授徒弟負笈者四方雲集明治廿一年讓住職于長男意海專從事教育矣先生爲人清廉寡欲恭以持己信以交人靄然薰之要之其道行有所酷似石門師焉大正二年八月十二日示寂世壽七十三門人共謀建碑及使余者其

銘余亦辱師弟之誼所以不辭也

銘曰

石門有人 學道尚純 教導循々 俾民維新

再辟拜恩 光榮所存 自称石言 師教是尊

大正六年十一月 水月哲英撰并書

【書き下し】

先生、姓は蒲池氏、名は德讓、石言と號す。八女郡西念寺緣測の長男なり。天保十二年二月を以つて生る。十六歳にして漢籍を石門德令師に於て學び、精勵すること十年、造詣する所有り。實に石門第一の高弟也。其名及號は、各の師之一字を冠す。蓋し由有る哉。先生又佛書に通じ、性唱導に長ず。元治元年、同寺第十世住職と爲る。明治六年、本山撰光院連枝の就いて石門師に學ぶ也、召に應じて侍講と爲ること凡そ三年、學德愈よ躋はれ、寵辟され再び明治十三年二月に至り、現如新法主、延いて侍講と爲す、希世之榮耀と謂うべき矣。在京一年、病を以つて辭し歸る。明治十八年八月、新に有萬家塾を寺側に設け、徒弟に教授す。笈を負う者、四方より雲集す。明治廿一年、住職を長男意海に譲り、専ら教育に従事せり。先生、人となりは清廉寡欲、恭以て己を持し、信以て人と交わり、靄然として之を薰す。之を要するに其道行石門師に酷似する所有り。大正二年八月十二日、志道示寂す。世壽七十三。門人共に謀りて碑を建て、及び余をして其銘を著せしむ。余亦た師弟之誼を恭しうす。辭せざる所以也。

銘に曰く

石門人有り、道を學んで純を尚ぶ、教導循々にして民をして維新ならしむ。

再び辭されて辟恩を拝す、光榮の存する所なり、自ら石言と称し、師教共に是れ尊し。

銘曰
 石門有人 學道尚純 教導循久 俾民維新
 再辟拜恩 光榮所存 自稱石言 師教是尊
 大正六年十一月 水月哲英撰并書

先生姓蒲也名德 號石言 五月生年六歲學書論於石門德公師精勵
 十年有所成 年二十歲 師也應召 講法主延為侍講可謂希世之榮 德英在二十一年以病辭歸
 及號谷莊師老一宗益廣 元年為同元第十世住職 明治廿年本山講光院連枝就學於石門
 高第也其各 佛書性長唱導元台
 年讓生時天長男高每喜 事教育矣先生為人 清廉寡欲不以持己信以交人
 露然薰之要之其道行有 折酷似石門師焉 大正二年八月十二日而寂世壽七
 十三門人共謀建碑於石門 銘余亦在 願宗之誦所以不泯也

【石碑拓本影印（裏面）】

大正六年十一月 水月哲英撰併に書

註

- (1) 水月哲英の学問に関しては、「第二章 創設者水月哲英の人物像」〔筑紫女学園百年編纂委員会編『筑紫女学園百年史』二〇〇九年〕三九〜六二頁参照。
- (2) 蒲池徳讓に関しては、以下の参考文献がある。石言先生顕彰会編『石言先生』(昭和三二年四月)、広川町教育委員会主催「広川町古墳公園資料館・第三回企画展 ふるさとが生んだ偉大な教育者 蒲池石言先生顕彰と滑石経展」(平成二二年一月二日〜二六日)リーフレット、「故郷の石碑シリーズ第七回『石言先生碑』」。有萬家塾に関しては、以下の参考文献がある。福岡県『福岡県学事年報明治一九〜三二年』(明治二〇〜三八年)、八女郡教育会編『八女郡郷土誌』(歴史図書社、一九七八年)、福岡県八女郡教育会編『郷土教育資料』(福岡県八女郡教育会、一九三四年)、福岡県教育委員会『福岡県教育史』一九五七年、図書福岡県教育百年史編さん委員会編『福岡県教育百年史』第五・七巻(福岡県教育委員会、一九八〇年)、町制三〇周年記念郷土史資料編集委員会編『ひろかわの郷土史町制三〇周年記念』(広川町教育委員会、一九八六年)。
- (3) 水月哲英関係資料の紹介として、木本拓哉「筑紫女学園所蔵水月哲英関係資料目録」〔筑紫女学園大学人間文化研究所年報』第三一号、二〇二〇年)、同「筑紫女学園校友会誌『筑紫』掲載水月哲英著作資料翻刻」〔同第三三号、二〇二二年)がある。本稿はこれに続く資料紹介である。
- (4) 水月哲英編輯兼発行『石門先生』(一九三四年、非売品)
- (5) 「蒲池石言先生小伝」(石言先生顕彰会『石言先生』一九五六年、非売

品)一頁。

- (6) 註3前掲木本論文参照。
- (7) 荒井周夫編纂『福岡県碑誌筑前之部』(昭和四年、大道学館出版部)には水月哲英の撰になる石碑として、「笠簾碑」(糸島郡伊都村高祖に在り、明治三二年撰併書)と「津田守彦碑」(糸島郡伊都村大字三雲に在り、大正一五年併書)の二基が掲載されている。

- (8) 註4水月前掲書序。石門に関しては、木本拓哉「猿姑射徳令小伝」〔筑紫女学園大学人間文化研究所年報』第三二号、二〇二〇年)に詳しい。

〔付記〕

石言先生碑拓本作業は、筑紫女学園大学人間文化研究所の共同研究メンバーを中心におこなっている「真宗文化史研究会」の活動の一環として実施した。作業は二〇二二・二三年度に実施し、田鍋隆男(研究所客員研究員)の指導のもと、八嶋義之(同上、福岡市史編さん室嘱託員)、木本拓哉(同上、北九州市工業高等専門学校准教授)、樋口すみ(本学卒業生)、三角徳子(同上、福岡市博物館専門員)、渡辺みか(同上、日田市世界遺産推進室)、宮原由橘菜(同上、福岡市博物館学芸課職員)、佐々木あきつ(福岡市博物館学芸員)、山口菜桜(本学在學生)、小林知美が参加した。作業用の仮設足場は、(有)ケイ・ネットワークの計画によった。

拓本作業にご協力いただいた西念寺御住職の蒲池承英師に謝意を捧げます。

(こばやし) ともみ…アジア文化学科 准教授)

